

EU 支部長: 松原 真実子 MATSUBARA Mamiko

e-mail: leoshironeko@yahoo.co.jp

青森県八戸市出身 国際文化研究専攻修了 現在 大阪府 太成学院大学 勤務 修士論文『異文化間コミュニケーションの研究—フィードバック作用—』

## 欧州 旅行者排斥、南欧で拡大＝暮らしに影響

住民悲鳴—経済支える観光業痛手 2017年08月16日



## この号の内容

- 1 欧州 旅行者排斥 住民悲鳴
- 2 EU支部だより

- ・観光業は地域を殺す
- ・ベネチア 遊泳禁止の運河に飛び込む観光客
- ・イタリア 11% 日本 7%



【ロンドン時事】バカンスの季節に入った南欧の観光地で、旅行者の排斥運動が広がっている。街にあふれる外国人への反感や住宅の民泊、ホテル転用が招いた家賃高騰などが理由だが、停滞する経済を観光業が支えている現実もあり、関係者は不安を隠せない。「観光業は地域を殺す」。スペイン東部バルセロナでは7月末、覆面をかぶった4人組が英国人らを乗せた観光バスを襲撃。タイヤを刃物で切り、窓にスプレーで抗議文を書いて逃走した。バルセロナの人口は約160万人だが、建築家ガウディの作品などを目当てに訪れる旅行者は年3000万人を超え、2016年度の訪日客(約2482万人)を上回る。特に最近では、宿泊需要を当て込んだ大家がアパートから住民を追い出し、民泊仲介サイトを使って旅行者に貸す事例が急増。2年前に「反観光」を掲げて就任した市長が民泊規制やホテル建設禁止などの対策を打ってきたが、住民の不満は高まる一方だ。バスを襲った組織は地中海のマヨルカ島でも旅行者を狙い、飲食店に発煙筒を放り込む事件を起こしたばかりだった。組織の幹部は英紙タイムズに対し、「旅行者は住民の生活費を押し上げ、低賃金、長時間労働の観光業で働くことを強いている」と主張し、過激な抗議行動を続けると言明した。「反観光」のうねりは他国にも広がっている。イタリア北東部ベネチアでは約2000人の住民が「旅行者は出て行け」と叫び、人数制限や客船の入港禁止を求めるデモを展開。クロアチア南部ドブロブニクでも、世界遺産に登録されている旧市街への入場制限を検討中という。反感を増幅するのが旅行者の「行儀の悪さ」だ。ベネチアでは遊泳禁止の運河に飛び込む外国人が後を絶たず、スペインのイビサ島では酔客による深夜の騒動が日常化。ごみを散らかし、生活空間にわが物顔で入り込む旅行者に閉口している住民は多い。ただ、有力な産業が少ない南欧では観光業が地域経済を支える重要な柱。世界旅行ツーリズム協議会(WTTC)によると、16年の国内総生産(GDP)に占める観光関連の割合は、日本が7%だったのに対し、スペインは14%、イタリアは11%を占めた。(写真:バカンスの季節に入った南欧の観光地で、旅行者の排斥運動が広がっている。写真はイタリアのベネチアで、「反観光」のプラカードを掲げてデモ行進する住民=7月2日撮影【EPA=時事】)

- ・増えすぎた観光客
- ・反観光の2つの動機

## EU 支部だより —観光客嫌悪症—

イタリア、スペイン、クロアチアなどヨーロッパの一部地域では反観光運動が起きている。ヨーロッパは観光地として人気があり、観光業は重要な産業の1つとなっている。一方では、増えすぎた観光客に対する地元住民の嫌悪も増加してきている。

そんな地元住民の反観光の動機は2種類あるようだ。1つは観光客の行為。夜遅くまで騒ぐ、ゴミをまき散らすなどの迷惑な行為だ。ベネチアではゴミの収集も運河と船で行われるが、観光客が増えれば増えるほどゴミも増える。そのため市内中心部への入場料設定や、新規ホテル建設に対する罰金制度も検討されているようだ。写真やビデオをとるために道をふさいだり、飲酒して騒いだりすることは、観光客にとっては一度限りのことだが、地元住民にとっては毎日のことでありまるで悪夢だ。という思いも十分にうなづける。第2に経済問題だ。押し寄せる観光客の宿泊に対応するため民泊も増加。アパートのオーナーが住人を追い出してまで観光客への宿泊サービスに貸し出すようなことも起こっている。これに伴って住宅価格や家賃が高騰し地元住民の生活が脅かされているという。その解決に向け観光客数のコントロールも検討されている。私は最近、友人と京都を訪れた。はんなりとした古都のイメージそのままに観光客となったが、ここは外国か。と思うほど外国人観光客ばかりだった。この夏休みは和歌山で過ごしたが、夕方ホテルのロビーで気が付くと日本人は私だけ。ということも何度もあった。日本は観光を振興させようとしている。そのこと自体は私も賛成だ。しかし、観光地のマナーやエチケットや常識は観光客には分からない。国や言語、文化が異なれば当然常識も異なる。観光客を受け入れる観光地は、それを前提としたうえでしっかりとルールを作り示すことが必要だ。さらに、なぜそのルールが必要なのかの説明もすることで、ルールの共有が可能となると私は考える。反観光の前に、まずは私たちができることをやっつけていこうではないか。私たちも観光地の人であり、そして、観光を楽しむ観光客にもなるのだから…。(松原)

